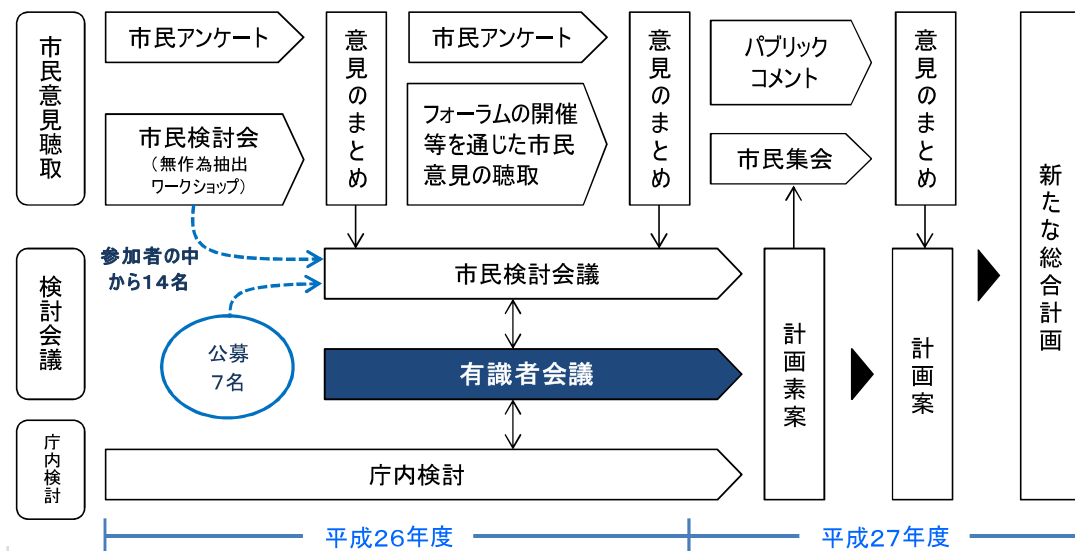


川崎市総合計画有識者会議 第2回ラウンドテーブル 開催結果概要

1. 「川崎市総合計画有識者会議」について

- これからの川崎の目指すべき方向性や取組を明らかにする「新たな総合計画」の策定にあたり、専門的な意見や助言をいただく場として、「川崎市総合計画有識者会議」をスタートしました。
- 「川崎市総合計画有識者会議」では、それぞれの政策分野の重点テーマを中心に検討を行います。
- また、新たなアイデア等を創造する場として、ゲストアドバイザー等を招いた「ラウンドテーブル」を各回の会議と並行する形で開催していきます。
- 併せて、別途設置する市民の声を幅広く集める取組である「川崎市市民検討会議」と検討内容を共有化し、市民の視点からの意見として活かしていきます。



2. スケジュールについて

平成 26 年 10 月 27 日 (開催済)	第 1 回会議 (策定方針、全国的な動向、市の概況)
10 月 29 日 (開催済)	第 1 回ラウンドテーブル (医療・介護連携)
11 月 27 日	第 2 回ラウンドテーブル (社会デザイン)
平成 27 年 2 月 1 日	第 2 回会議 (社会福祉、子育て支援・教育等)
3 月 13 日	第 3 部ラウンドテーブル (都市拠点暮、交通体系)
3 月 23 日	第 3 回会議 (まちづくり・防災等)
4 月 (予定)	第 4 回ラウンドテーブル (イノベーション)
5 月 (予定)	第 4 回会議 (産業・経済等)
6 月 (予定)	第 5 回ラウンドテーブル (自然共生・住民自治)

3. 委員

- 会議は下記の各分野に専門性を有する有識者により構成されています。

氏名（敬称略）	分野	役職等
涌井 史郎（座長）	ランドスケープ・環境	東京都市大学 環境学部 教授
出石 稔（副座長）	地方自治・地方行財政・コミュニティ	関東学院大学 副学長・法学部 教授
秋山 美紀	社会福祉・ソーシャルデザイン	慶應義塾大学 環境情報学部 准教授
垣内 恵美子	文化・教育	政策研究大学院大学 政策研究科 教授
中井 検裕 ※	都市計画・交通計画	東京工業大学大学院 社会理工学研究科 教授
平尾 光司	地域経済・産業振興・イノベーション	昭和女子大学 学事顧問

※は欠席

4. 第2回ラウンドテーブル（11/27）の開催結果について

日時：平成 26 年 11 月 27 日（木）18:00～20:00
会場：川崎市役所 第4庁舎 第3会議室

(1) テーマとゲストアドバイザー等

■ テーマ「意識をデザインする」

■ ゲストアドバイザー：須藤 シンジ氏（NPO 法人ピープルデザイン研究所代表理事）

(2) ゲストアドバイザーのご講演の概要

- 川崎市と NPO 法人ピープルデザイン研究所は、平成 26 年 7 月に包括協定を締結しており、ピープルデザインの考え方（心のバリアフリーをクリエイティブに実現する思想や方法の考え方）を活用し、多様な人々が混ざり合うダイバーシティ（多様性）のまちづくりをめざした取組を進めています。
- NPO 法人ピープルデザイン研究所代表理事である須藤シンジ氏をゲストアドバイザーとしてお招きし、「ピープルデザイン」の考え方により、人々が持つ「意識のバリア」や従来の福祉のあり方をファッションやデザインの力で変えていく取組についてご紹介頂きました。



須藤シンジ NPO 法人ピープルデザイン研究所代表理事

(3)主な意見

***ダイバーシティ（多様性）の実現について**

- 意識のバリアフリー化を進めていくためには、障害者が格好よく社会に出ていけるようにすることが重要である。障害者に限らず、若い世代が、格好いい、欲しいと思えることが大事であり、違和感なく健常者と障害者が混じり合うことが重要である。
- ダイバーシティ（多様性）の実現には、Tolerance（寛容さ）が必要であり、それには、サブカルチャーへの文化的理解が必要となる。そして、サブカルチャーとテクニック（技術）がマリアージュ（結婚）していくべきで、また、今あるサブカルチャーが上質なサブカルチャーに転換していくことも重要である。
- このような取組は、部局横断で取り組むことが重要である。福祉の議論だけで留めると、小さくまとまって終わってしまう可能性がある。

***ライフスタイルを創造する産業の必要性について**

- 障害に関する課題解決には、May I help you?（お手伝いしましょうか?）の精神が重要で、加えて、イノベーションでそれを解決していこうという発想がよい。
- 川崎市には、イノベーションのベースとなる産業的な基盤が豊富にある。いわば、クリエイティブシティ（知的創造都市）と言える。例えば、車いすの部品、センサー、モーターなどのツールは、全て川崎市に存在する。新たな車いすの開発等による障害者福祉の向上が、新しい産業を作り出す推進力となり得る。
- これからの産業界には、ライフスタイルをクリエイト（創造）できるようなイノベーション、いわば「ライフスタイルクリエーション」が重要で、そのためには、川崎市の産業シーズ（事業化、製品化の可能性のある技術）をツール化し、システム化する仕組みができるとよい。
- 現在は、大量に安価なものを生産していく量的充足社会から、市民のQOL（生活の質）を上げていくような産業形態への移行期にある。デザインと産業をうまく結びつけて成功事例を積み上げていくことが、多くの方にアイデアを理解してもらうために必要であり、マーケットで経済的価値を生むことで賛同者を増やすことができる。
- ライフスタイルの転換はパラダイム（ある時代を牽引する考え方）「シフト」というより、パラダイム「スイッチ」と言えるくらい、めざましいものでなければならない。

***東京五輪を契機とした取り組みの展開について**

- 福祉の議論になると、すぐ負担と給付のネガティブな政策論になりやすい。狭義の福祉施策だけでなく、健康づくりといったポジティブな政策への転換を図るべきであり、東京オリンピック・パラリンピックの開催が、それを確認する場になるとよい。
- 川崎市は、パラリンピック側の立場で、弱者が弱者でなくなるような魅力あるまちづくりを重視すべき。
- 等々力競技場をパラリンピアン練習場として利用できるようにし、パラリンピアンと市民が、世代や時間を超えて同じフィールドで共存できる場にするアイデアもある。
- 東京オリンピック・パラリンピックへの対応として、何に取り組み、どのようにして市の発展・展開につなげていくか、具体化すべき。ライフイノベーションも含めて、新しいオリンピックレガシー（遺産）の創造という点において、ピープルデザインの考え方と市の取組がマッチングすればすばらしい。